同窓会報

第4号

社団法人
上田高等学校同窓会
昭和43年8月21日発行

印刷所
信州民報

会館維持軌道に乗る

会員募金は約十万円減

同窓会の最大な悩みであった同窓会館の維持管理は、ようやく軌道に乗り、昭和四十二年度の決算では一五一、八三円の余剰金をみるに至り、将来に希望がもてるようになった。また奨学資金部も五八〇、七四九円の繰越金を持つようになり、これまた明るい見通しがついた。

同窓会愛で

しかし別項、昭和四十二年度の決算に示されたように、予算では三十万円を予定した維持会員費（同窓生で会館維持のために年額一口五百円醵金）が、決算では二十万五百円と九万九千五百円の減少を見たことはなはだ遺憾であった是非とも同窓会愛の精神で本年度は倍増を期待したい。

奨学金に余剰

奨学資金部は同窓会の支出額金二十万円があり繰越金、利子等を併せて百八万五百円の収入となり、貸出金は十万三千五百円であるので五十八万七百四十九円の繰越金を見るに至った。このため昭和四十三年は例年支出の二十万円が五万円に減額されることになった。しかし、差額の十五万円は上田高校の応援団の太鼓、団旗が破損したために、新調の費用と、浪人対策として学校が実施する進学指導費の新規支出と、会員名簿調査費の増額に向けられることになった。

決算予算項目	42年度決算額	43年度予算額
収入	1,752,235	1,983,732
内訳　財産収入	48,658	50,000
入会金	736,500	679,500
維持会員費	200,500	250,000
会館維持負担金	539,844	600,000
雑収入	134.750	250,000
繰越金	91,983	151,832
歳出	1,600,403	1,983,732
第1事務費		
給費	406,030	480,000
備品費	58,350	63,000
光熱通信他	516,402	600,000
会議費	156,055	175,000
雑費等	16.170	37,860
予備費	1,900	64,872
第2事業費		
会報発行	51,150	70,000
奨学金	200,000	50,000
同窓会賞費	12,600	20,000
転退職職員記念品他	44,500	33,000
運動部補助	30,000	30,000
慶弔費	25,140	25,000
会館修理費他	56,296	180,000
新入生記念品料	25,810	25,000
進学指導助成費	0	30,000
応援団機具購入費	0	100,000
収支差引残高	151,832	

連合会作ろう

関東地区には長野県の各高等学校同窓会支部が集合して、東京同窓会連合会の組織が昭和四十年六月に誕生している。それに反して長野県内に高校同窓会連合会のないことは本末転倒ともいえるので、本年度中には、是非とも県内の同窓会連合会を創立したいと、柳沢理事長は事務局に指示して、このほど県内同窓会の正副会長名簿を作成、連合会結成の準備を開始した。

年ごとにふえる出席者

43年同窓会春期総会開く

昭和四十三年同窓会春期総会は、五月十九日午後二時半から同窓会館で開催、六十余名の出席者があり盛会であった。議題は次ぎのようで満場一致で議決をした。

議題

1、昭和四十二年度事業報告及び決算承認の件
2、昭和四十三年度事業計画並びに予算承認の件
3、同窓会奨学資金の決算の件

当日は柳沢文正東京都立衛生研究所臨床試験部長（二十九回卒）の「長寿論」の講演があり、いずれも長寿を考える年齢者ばかりなので好評を博した。同窓会総会の講演は回を重ねるごとに評判がよくなり同窓会の名物の一つとなって来た。

関東支部大会

出席者三百人越える

第七回関東支部大会は、昭和四十三年六月七日午後五時半から東京麹町会館で挙行され、出席者が三百名を越える盛況でさすが関東支部の気をはいた。

この大会のためには大会準備委員会が組織され、数回の会合を行ない、五月九日には麹町会館で総決起幹事会を開催するなど、努力の結晶がその陰にあった。

四季折々の行楽に別所温泉へ

柏屋別荘

TEL（塩田）026894 —代2345

社長　斎藤房雄　（16回卒）
副社長　斎藤三雄　（46回卒）

株式会社　長野プロパンガス

社長　成沢忠兵衛　（27回）
専務取締役　鈴木　健吉　（29回）
常務取締役　山寺　豊一　（31回）
常務取締役　伊藤　仁　（7回）

上田市国分　TEL（代）② 5581

53年目同級会の味

東京会合第十四回卒業生

塩沢　隆平

ときは本年六月七日、ところは東京麹町会館当日午後五時から上田高校同窓会関東支部総会が同じ会館の大広間で開かれた。われわれの同級会は午後一時からであった。同級というのは大正四年三月卒業（第十四回）だから、いまの在校生諸君の五十年以上先輩の老骨共のつどいである。同級会の終了後関東支部総会にも出て見たら、という在東京諸君の一石二鳥の頭のいいスケジュールだった。集まる者ようやく十三名、うち郷里からは四名のみ、その一人が小生であった。なにせ八十四名の卒業生のうちもう半数しか生きていない、病気の人達もいるという訳だから十三名の出席は必ずしも少数とは言えない。未だ丈夫で職場を持ったり、老後の仕事ながら何かはしている諸君である。

夢の如し

一昨年上田高校同窓会館で満五十年の会をしたと郷在郷の者が生文して次回は東京でと決まった。それに答えて在京諸君がうまい発案をしたのだった。郷里で同級会をしても一度も顔を見せなかった諸君がいるので、十四名だけの会には、会館の席は広過ぎ、あの君はたれか、見当のつかない諸君さえいた。〝茫々夢の如し〟と独歩の詩にあるが、その感が深い。五十三年目にはじめて会ったのだから頭がつるりと禿（は）げたり、白髪（しらが）になったりで昔の紅顔の美少年の面影（おもかげ）はなかった。そこで発議があって一人一人自己紹介をしながら立ったついでに、所見なり、亡友の追憶なりをしようということになった。あーあの禿頭が旺球の名選手だった。あの白髪が植物など好きだった君か、とようやく同級会らしいふん囲気になった。田舎ばかりにいると、人間世界の大勢どころか、同級生の世界さえ分らなくなるんだと、わが心に言ってみたりした。

最後の君

小生の組は、多種多彩の観があった。半数は国立、私立大その他専門学校等々上級校に進んでいて、日本で有名な画家になったり、有名な役人になったり、学者として嘱望された君が卒業数年にして死んだり、衆院、参院議員になったり、海外に留学したり、海軍の軍人になって将官までゆき太平洋戦争で戦死したりした。そうかと思うと高校卒文で地方の大銀行の重役になったり、進学指導などのない時代に、各々自分で進みたい道をよくも選んだものだと思い、家庭の事情などでいい素質を持ちながらどこへもゆかず惜しかった君のことなど、いろいろと話し合いのうち、追憶の泉にひたされるのだった。小生も二、三の諸君の追憶談をしたが、一人は立派な学者になれただろう君の非業（ひごう）の死の通夜をした話、一人は海軍将官だった君が、昭和十九年二月戦争も末期に近いころ突然、帰郷した。小生に酒の用意があるから来いというので、一本携えていってほとんど徹夜で酒杯をくみかわした。家人も寝静まったとき「おい君、今度帰任すればおれは死ぬ。これが最後と家人にも君にも会いに来たのだ。家の者にもたれにも言わない。黙って帰ってゆく。」と言って戦線に戻った、一か月ほどだったと思うが、ガダルカナルで死んだ。死にぎわが実に立派だったと、生き残りの一人からの話をまた聞きにした。小生はその話をした。その君は戦争に勝目がない、と山本五十六氏のように思っていたのだと思う。

生は死なり

戦争で死ぬことは、これからはおそらくないだろうが、人間はたれでも一度は死に直面する。死ぬときの覚悟は、畳の上でもどこでも同じである。その覚悟を立派にすることが人生の根本だと思う。〝生きることは死ぬことである〟―真に生きるということは現世的に死ぬこと、つまり名誉や地位を問題にせぬことだ、とはあるすぐれた哲人の言葉だ。立身出世主義など下の下だ。しかし自然に世間が認めて、または自分で努力していわゆる出世するのは当然だろう。先ごろ上田高校放送班からインタビューに来てくれたときも申したが、昔の野性味を持ち、個性が自然に育（はぐく）まれた気がする〝生きることは死ぬことなり〟なかなかむずかしいことで、私など凡人は未だにその境地に達し得ないが、少くともそれを高校教育の理想としたいものだ。

▼わたくしは昨年の春はからずも上田高校長を拝命したのでありますが、思えば上田高校は一度の勤めであり、二人の子供までも上田高校を母校とする仕合わせに恵まれて、縁まことに浅からぬものを覚えています。

▼わたくしが以前にお世話になったのは昭和二十七年から昭和三十四年の春までの丸七年間でほぼ一昔前のことになります。中沢睦次郎先生が校長であった時、サンフランシスコ条約が調印され、わが国の教育が初めて真実の意味において、われわれの手に戻って来たのでありますが、わたくしは中沢先生が、新らしい上田高校（当時は上田松尾高校と呼んでいました）の在るべき姿、進むべき道、松本深志や長野高校とは違った上田の姿、上田の道の確立に苦心されていたことを想い起しています。

▼わたくしは中沢先生の築き上げた大道が、一言で尽せば〝日日の授業を大切にする〟毎時間の授業に教師も生徒も全心全霊を打ち込むということではなかろうかと思います。わたくしは

"日々の授業を大切に"

（ごあいさつ）

上田高校校長　小林俊直

この授業を大切にすることが上田高校の教育の中心に腰をすえ、ここにあるすべての人の心の中に定着していることをうれしく思っています。

▼なるほど授業は学校教育活動の中核であります。しかし授業を大切にするあまり、これのみが教育だと考えて思い過ごすならば、これは中沢先生の精神を誤解するものと思います。教育とは人間形成であり、生徒の一人一人のかけ換えのない生命を愛し育てることだと思います。

▼わたくしはこのごろ、東京の子供と、上田の子供が段々と見分けがつきにくくなって来ているように思われてなりません。これはわたくしの眼力の衰えかとも思うのですが、他の人達も同じようなことを言っておられます。このことは一人一人の生命を愛し育てる教育にとっては看過しえない極めて重大なことと思います。上田には上田だけの歴史と、風土の中に培（つちかわれる知性に富んだ個性ゆたかな面（つら）魂というものがあってしかるべきだと思います

▼ここにおいてわたくしは学校教育における特別教育活動と言われる生徒会活動や、運動や、学芸班のクラブ活動の重要さを思うのであります。先輩の血と汗によって築き上げた幾多のものは、こうした活動の諸領域に伝統として生きているのであります。わたくしは、授業とこうした活動を車の両輪として、上田高校をさん然たる未来に向って前進させて行きたいと思っています。皆さま方の一層のご指導ごべんたつをお願い申しあげます。

銘酒　亀齢醸造元
株式会社　岡崎酒造
社長　岡崎光雄　（54回）
上田市柳町
TEL上田②―0149

・日本専売公社指定工場
・旭ダウ　長野県総代理店
（段ボールケース・各種包装資材
緩衝材エサフオーム・スタイロパック）
上田企業株式会社
取締役社長　鈴木　俊　（29回）

〝誠〟こそ人間の真髄

依田先生胸像建設に寄せて

第14回卒業生　稲垣征夫

依田誠先生が昨年体育功労者として文部大臣から表彰された。これは誠にうれしいことで慶賀に堪えない。この表彰より一年も前からたれいうとなく依田先生の長年に亘る教育者としての功績をたたえて先生に胸像を贈ろうではないかといった話が進められ、この文部大臣の表彰で一層その気運が高められた。話もだんだん煮つまってきて、先生の肖像画を柔道場に掲げようではないか、あの奥さんには随分お世話になったから、ご夫妻でハワイへでも旧婚旅行にでも行ってもらったらどうか、というところまで進み、資金募集を始めた。できるだけ多くの人々からのご賛助をお願いしたい。

先生は親孝行である。先生が生まれたとき、ご両親はほかのことはどうでもよい。「誠」の一字を肩身離さず一生守ってくれ、との強い祈りをこめて「誠」という名をつけられた。先生は、このご両親のご期待にこたえて「誠」を七十三歳の今日まで守り抜いて来られた。聞くだけでも感銘の深いことである。

静岡県三島高等学校の剣道場に前校長の筆になる「一源三流」という額がかかっている。これは三島高校の校是であって、一源とは「誠」であり、三流とはこの誠から流れ出した三つの活動面における具現であり、第一流は国のためには血を流す。第二流は家のためには汗を流す。第三流は友のためには涙を流す、ということであるらやましい校是であると思う。

私は「誠者之道也。至誠通天」というような教えは半世紀以上前から教えられていたものである。「公」の道徳の中心は忠、「私」の道徳の中心は孝、忠孝一体がわれわれが教えられた人間道であった。この忠、この孝も窮極するところ「誠」の泉から流れて来たもので、誠こそ道徳界に君臨し王座を占むべきもの、すなわち天の道であると思うのである。

東京にも東京柔和会というものがあり、私が年長者だということで会長に推されている。この会員のなかで中学時代に一番先生を手古ずらせた人々が今日、東京でたれにひけ目も感ぜず、横行かっ歩している。それは依田先生の愛の鞭（むち）のおかげだと、一番先生を尊敬しており、こんどの挙にも両手をあげて賛成してくれた。それを思うと、教育とはこうありたいものだと思うし、教育の真髄にふれた感じがする。

戦後諸外国からの圧力があって、教育というものが混乱してしまい学校は人格養成の大切な道場であるという意味もどこかへとんでしまった。全学連の暴走暴挙といった現象が現われ、大学における理事者と、学生との対立といった現象も現われ、世人の非難の的となっている。

これについては、先生も生徒もPTAもみんなで反省すべきで、次の世代を背負う大切な若人の教育については、全国民が真剣に取り組んで、「学校というものはかくあるべきもの」という学校像を示してもらいたいと痛感する。

このときに当たり、誠をもって教育の本義なりとして、終始一貫自己の全精神全肉体を、若人の教育に投入してがん張って来られた依田先生のお姿は尊いものであり、このように先生に対して感謝報恩のことを行なうのも、有意義なことであると確信する。重ねて皆さんのご賛同をお願いする次第である。

恩師依田先生をたたえる

22回　中野源三郎

恩師依田先生には体育功労者として文部大臣より表彰の栄誉を受けられました。四十数年間のご心労とご努力とに対する大いなる報いであり、まことにご名誉のことと存じます。

☆　☆

先生が私達母校である上田中学校に奉職されたのは私の四年生のときだったと記憶しております。柔道の先生が幾人も替わられて、私達も何かして良き先生を迎えたいと願っておったとき、母校の先輩であり、講道館にこの人ありといわれた依田誠先生を迎えた私達は、ほんとうに仕合わせの極に達した思いでありました。先生にはそのとき前途有為な会社を大勇猛心をもって退かれ、ご赴任を決意されたと聞きます。それ以後毎日の授業にも放課後のけいこにも心がこもり、年々よき選手も出て上田中学柔道部の名声を天下に知らしめたのであります。全日本柔道選手権大会で、優秀賞を得た選手権保持者横関辰雄君も、その当時の先生の教え子の一人であります。

☆　☆

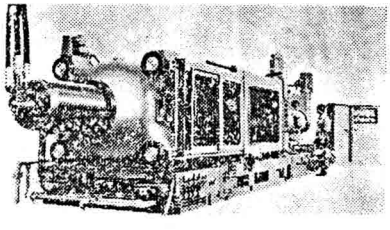
近時ややもしますと、師弟間の愛情が以前より薄らいで行くようにいわれています。これは学校組織の変遷とか、先生の待遇問題とか世相の複雑な事情から来ていることと存じますが、それにしましても師弟の情というものはいつまでも不変であらねばならぬものと考えます。社会状況の変遷によって師弟の間柄にも変化濃淡がもたらされるということはまことに遺憾のことであります。

☆　☆

そんなことを考えますにつけても先生が終始一貫、変わらざる教導に過（まい）進しておられますことに深く感激をおぼえるものであります。私達にはあの当時の毎日がほんとうに楽しく愉快でありました。先生は私達一人一人に、親も及ばぬほどの慈愛のこもった世話をして下さいました。暑中休暇には毎年東京講道館にけいこに行き、あの暑い都会で寝食を共にし、苦しい中にも団らんに恵まれた一家族でもあり、また兄弟でもありました。またあるときは先生のご郷里小諸在から夜を徹し浅間山登山をし、道に迷って共に苦しんだことなど忘れ難くいまなお私達の心に生きております。

☆　☆

あの時代からすでに五十年になんとしているにもかかわらず、先生の現在は若きをしのぐご元気で、まるで老いをご存じないもののように見受けられます。今回のご栄誉は、四十数年永い年月の不変のご信念から生まれたご努力と先生の辛酸をなめられた賜で、当然のこととはいえ、私達が衷心より慶賀してやまないところであります。

NISSEI
日精の
プラスチック成形機

日精樹脂工業株式會社
取締役社長　青木　固（30回）
常務取締役　室賀千秋（36回）

各地の同窓会

62名の慰霊祭

第三十五回卒業生は五月二十五日同級物故者六十二名の慰霊法要供養を行なった。同級生の出席者三十三名、遺族十名、金子憲行、新沢桂厳師の導師により厳粛に執行した。

三十五回卒業生は昭和十一年三月二百八十名が卒業したが太平洋戦争中応召出征して南寒北海に散華した者、確固たる生業を営むうち不幸中道において病魔に倒れた者また不慮の災に倒れた者等六十二名、遺族を慰め、追憶にふけった。

第20回同期会

上田第廿回同期会は梅雨明けの七月廿日軽井沢後藤別荘で催された。県外では東京から九名、千葉、埼玉、群馬から四名、県内十三名計廿七名で近来にない盛会だった。

ことしは東日本観光バスの専務の後藤君が別荘を提供してくれ一昨年と同じく東京からの諸君のため往復バスを無料サービスしてくれたので猛暑をよそに楽しい一夜を語り明かすことができた。

一泊するもの廿一人修学旅行のように三密に枕をならべて夜中まで語っても思い出はつきなかった。翌日は朝食後旧軽井沢の街を散策来年の再会を約して正午解散した。（遠藤記）

〃内村会〃

二月三日一陽来復の節分の前日「内村会」（丸子町東内西内在住）が鹿教湯温泉鹿月荘で同窓会を開いた。参加者十三人。中村十城事務局長開会のことば、滝沢藤一郎先輩あいさつ、同窓会本部からの祝電、小林校長からの祝辞、前校長清水次郎先生乾杯音頭で祝宴に移り、自己紹介を行なった。長い者は六十余年、短い者が二十三年、古城の門を出てからの珍話奇話、失敗、成功と懐旧談は尽きず、春宵のひとときを楽しく過ごし、内村会の歌（金子即吟）に続いて斉藤技師による記念撮影があり、後日の再会を期して別れを惜しみながら散会した。

物〃故〃者

前号発刊後の物故者は次の通り、なお氏名の下の数字は卒業回数。

岡崎　志二 2　伊藤　均 7
金井　章次 4　出浦　厳 8
伊藤憲太郎 7　峰村　寿命 9
柳沢草三郎 9　水野　鼎蔵 9
山辺　優 10　松本　岩勝 10
山浦　貫一 11　八木　誠政 11
三村　義郎 13　武重　孝一 14
田甲　弘泰 15　工藤　真司 15
田島袈裟五郎 16　花岡　虎夫 19
長久保信夫 19　奈良本昌治 19
笠井幸之助 20　柳沢　謙二 20
小山　久士 22　丸山　寛 22
飯島松太郎 22

◇

羽生　功（元校長）

宮下　真澄 23　成沢万千雄 23
中島　一雄 25　竹内　武 25
宮田　正晴 28　小林　義信 28
山浦　計典 32　島田甲子三 33
桜井　良人 35　田口　信也 38
小林　孝平 40　橋本　仁蔵 42
大井　卓 42　石坂　克己 48
六川　常夫 48　小山　尚武 48
堀本　雄一 50

気をはいた

母校運動部

母校運動部中、県大会以上に出場した部は左の通りであった。

弓道班　インターハイに出場し、決勝トーナメントで技能賞四位となる

体操班　クライミングロープ（近藤）がインターハイに出場

剣道班　北信越大会に出場

陸上競技班　二〇〇米、及び四〇〇米に中曽根が、またハンマー投げに日向が北信越大会、インターハイに出場

軟式庭球班　北信越大会に（大草山崖）が出場

ハンドボール　北信越大会、並びにインターハイに出場二回戦まで

お願い

同窓会報、学校新聞、各種会合の案内及び連絡事項などを発送しますと、住所変更あるいは不明のため返送されるものが非常にたくさんあります。本人はもちろん、もし知人あるいは同級生の方がたのうち、これらの書類がお手もとに届いていない方がありましたら、正確な住所を事務局までお知らせ下さいますようお願いいたします。なお現在名簿を訂正しておりますが郵便番号、電話番号等も配入願います。なお各期会や各支部の催し、ならびに物故者の氏名もご報告下さい。お願い申し上げます

会員の近著紹介

☆　☆

書名　八日堂物語
編者　山浦国久（一六回）塩入良道（三九回）
発行所　国分寺内八日堂復興会

☆　☆

書名　徒然草解釈大成
編者　峰村文人（三〇回）他
発行所　岩崎書店

☆　☆

書名　上田藩農民騒動史
著者　横山十四男（四二回）
発行所　上田小県資料刊行会

☆　☆

書名　信濃の川魚とその調理
著者　小山一平（三一回）他
発行所　菅平研究会

☆　☆

書名　長生きと食物
著者　山本鼎と富田白羊
発行所　上田小県資料刊行会

☆　☆

書名　長野県医師会保健部委員会の歩み
著者　柳沢文秋（二七回）
発行所　長野県医師会

☆　☆

書名　一〇〇歳まで若く美しく
著者　柳沢文正（二九回）
発行所　績文堂

☆　☆

書名　詩集　木意の微風
著者　柳沢文正（二九回）
発行所　東洋経済新報社

☆　☆

書名　わが青春時代の仲間たち
著者　新田潤（二二回）
発行所

☆　☆

書名
著者　柳沢文正（二九回）
発行所　晶文社

☆　☆

雑誌「上田盆地」上田民俗研究会の機関誌、年に数回出る。最近十一号が出た。箱山貞太郎はじめ同窓生の執筆が多い。毎号二〇〇円位。（上田市立図書館内同会宛）

以上は狭い見聞の範囲でまとめましたので、遺漏も多いことと思います。お気付きのところはお聞かせ下さい。なお著者には新著刊行の際こちらに一部御寄贈いただければ幸甚です。

著者　柴沢孝輔（四七回）

機械工具の御用命は！
株式会社　矢島商店
社長　矢島晴一郎（45回卒）
上田市常入1206
TEL上田(02682)2代7171

あなたが主役
株式会社　ほてりや
上田中央一番街　代(2)8181
取締役社長　成沢忠兵衛（27回）
取締役副社長　成沢守雄（51回）
常務取締役　町田吉司（47回）